

第十五講 レポート講評と授業の総括

レポート講評

レポート課題は初期王朝期以降のメソポタミアの政治史の枠組みを押さえられているかを問うものであった。問われているキーワードは以下挙げておく。

ルーガルザゲシの帝国（前 2340～2315 年）

南部メソポタミアの統合・シュメール人諸都市の連合・キシユのサルゴンと同盟
アッカド帝国（前 2318～2190 年）

サルゴン：シャルル・キン（「真の王」という意味）

小アジアからペルシア湾まで統合

貿易による物資の輸入確保を重視

アッカド人官吏による帝国統治（エンシ：都市長官の派遣）

軽装弓兵隊という常備軍

マニシュトウス：宮廷内のクーデタ・山岳民の侵入・南部諸都市の反乱

ナラーム・シン：国内の反乱鎮圧・山岳民のルルビ人制圧

シャルカリシャッリ：グチ人の侵入・帝国の滅亡

グチ人の支配（前 2190-2120 年）：21 人の王が交替する短期政権

南部シュメール人の反乱

ウルクのウトゥヘガル（前 2120-2113 年）：グチ人の支配を倒す

ウル第三王朝（前 2113～2005 年）：官僚支配体制の確立

ウルナンム：シュメールとアッカドの王を名乗る

法典編纂・神殿建立・度量衡の統一

シュルギ：ウルの全盛期・帝国の中央集権体制確立

官吏の定期的異動

イビシン：アムール人の侵入・帝国各地の反乱・エラム人の侵攻

イシン・ラルサ時代（前 2005～1763 年）

シュメール人からアムール人へ

イシン：イシュビ・エラ：北部・ニップールやウルを制圧・エラム人を撃退

リピト・イシュタル：法典編纂・ウルを失う（前 1926 年）

ラルサ：南部

グングヌム：エラム遠征・ウルをイシンから奪取

リムシン：最盛期・河川や運河の開削・神殿建立・交易の拡大

反ラルサ同盟を撃破（前 1798 年）

バビロンのハムラビに敗れる（前 1763 年）

メソポタミアにおける政治史の流れはしっかりと理解されていたし、内容も要点は把握されていた。

アッカド帝国の記述が多く、ウル第三王朝以降の記述が少ないというアンバランスなレポートが散見される。

アムール人とアラム人を混同した記述が多いように思われる。

授業総括

この授業はメソポタミア地方における文明の興隆と展開を後氷期から初めてイシン・ラルサ時代まで講じた。第一講ではヨーロッパにおけるオリエンタリズムの問題について論じ、第二講では先史時代の環境変化と農業文化の勃興を論じるためにその前提となる理化学的なデータとその評価について紹介した。

第三講ではレバント地方における農業文化の発生とその限界を講義し、第四講で古代メソポタミア史のタイムスケールと時代区分を扱った。そのうえでメソポタミア地方の自然環境を分析し、それに対応した人間社会の文化について考察を加えた。第五講では灌漑に依存するメソポタミアの農耕文化の特徴について触れた。

第六講ではシュメール人の都市国家の特徴について講義を行った。第七講では初期王朝期（前 2800-2350 年頃）の歴史、第八講および第九講ではシュメール人の国家社会についての諸学説、第十講ではシュメール人の生活文化について触れた。

第十一講ではルーガルザゲシの帝国とそれに続くアッカド帝国について講義し、第十二講ではウル第三王朝の歴史を取り扱い、第十三講ではイシン・ラルサ時代のメソポタミア史を論じて、ハムラビのバビロン第一王朝への前史を扱った。第十四講では諸君の学習・研究の実績を調査するためにアッカド帝国からイシン・ラルサ時代までのメソポタミア史についてレポートを課した。

この間授業では随時レポートを課してきた。「光は東方より」という言葉は何を意味しているのか？、「人はなぜ農業を始めたのか？」、「メソポタミア南部の農業の特徴について論ぜよ」、「シュメールにおける初期王朝期の歴史と特徴について説明せよ」「シュメールの国家論についてどのようなモデルが存在しているのか？」、「アッカド帝国からイシン=ラルサ時代までのメソポタミアの歴史を論じなさい」という課題のレポートを諸君に問うてきた。

この授業ではヨーロッパ人の古代オリエント史理解の問題点、古代オリエントの歴史の背景にある環境、国家・社会の特色、歴史の個々の局面と全体像に接近することを目

的としていた。授業はたんに出席してノートをとるだけでは不十分であり、自ら積極的に様々な課題に取り組んでいくことを要求してきた。